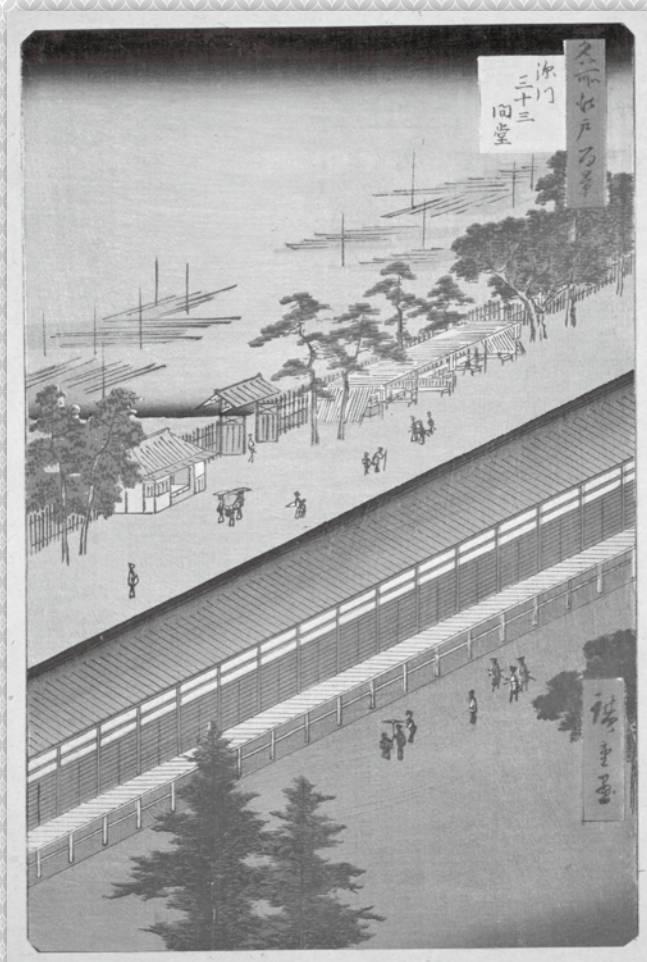


令和元年度 文化財保護強調月間

歴史と文化を 考えよう



名所江戸百景 深川三十三間堂 広重
(国立国会図書館デジタルコレクション)

下町文化



KOTO City In TOKYO
スポーツと人情が熱いまち 江東区

NO.
287
2019.9.27

発行

江東区地域振興部
文化観光課文化財係
〒135-8383
江東区東陽4-11-28
TEL(03)3647-9819
<http://www.city.koto.lg.jp/>

○文化財保護強調月間

歴史と文化を考えよう

- ・ 民俗芸能大会
- ・ 文化財講演会
- ・ 東京9区文化財古民家めぐり
- ・ 江東区伝統工芸展

○江東区の水運を考える①

小名木川

○加瀬忠次郎とヨウ素製造

○江東歴史紀行

第一回懸賞郵便飛行と「洲崎飛行場」

○古写真の中の江東

江東区の映画館2

文化財保護強調月間

江東区教育委員会では、毎年10月から11月にかけて「文化財保護強調月間」を設け、歴史と文化を考える機会としています。

また文化をより身近に感じていただくため、区内に伝えられた「民俗芸能」「伝統技術」を公開するイベントを設けています。こうした機会を通じ、江東区の歴史と文化を少しでも体感していただければと考えています。

公開イベントとしては、日常生活・仕事・祭礼から生まれ、長きにわたり受け継がれた民俗芸能を公開する「民俗芸能大会」。伝統的な技術を基礎にモノ作りに携わる職人が、その技術を公開し、体験することもできる「伝統工芸展」。さらに文化財についてより深く知ることができる「文化財講演会」など、多彩なものになっています。

その他にも東京文化財ウィークの一環として、都内9区による古民家めぐりが行われます。江東区は、南砂にある旧大石家住宅（江東区指定文化財）が対象となります。

各イベントの詳細については2・3頁をご覧ください。皆様方のご来場を心よりお待ちしております。

民俗芸能大会

10月20日(日)

会場 都立木場公園

【午前11時～12時30分】

場所 木場公園内入口広場

木場の角乗

東京木場角乗保存会

江戸時代、木場の筏師(川並)は、鳶口一つで材木を筏に組んでいました。角乗は、その仕事の余技として生まれました。

【午後1時～3時20分】

場所 木場公園内ふれあい広場

木場の水遣

木場木遣保存会

木場の川並衆が材木を操る時、お互いの息を合わせるため、歌われた労働歌です。

木場の水遣念仏

木場木遣保存会

木場に伝えられたもので、大数珠を手繰りながら念仏を唱える大変珍しいものです。

砂村囃子

砂村囃子睦会

江戸時代中期に金町の香取明神社(現葛飾区葛西神社)の神官が農民に教えた祭囃子の流れを汲むお囃子です。

富岡八幡の手古舞

富岡八幡の手古舞保存会

富岡八幡宮の祭礼で神輿の先頭に立ち、木遣を歌いながら、男鬘に裁着袴という粋ないでたちで練り歩きます。昔は、辰巳芸者が行いました。

深川のか棒

深川力持睦会

江戸時代から倉庫地帯であった佐賀辺りで、米俵や酒樽などの運搬をする人々の余技として芸能化しました。



文化財講演会

入場無料

「伝統工芸と文化財保護」

江東区では「江東区伝統工芸展」などを通じ、伝統工芸の公開(実演・体験)を実施しています。

本年度の「文化財講演会」では、長年にわたり、文化庁で無形文化財(工芸技術)を担当され、伝統工芸の保存・継承と公開・普及に努められた佐々木正直氏(江東区文化財保護審議会委員)に、文化財保護という観点から伝統工芸についてお話していただきます。

日時 11月13日(水)

午後6時30分～8時30分

会場 江東区教育センター

1階大研修室

(江東区東陽2-3-6)

定員

150人(先着順)

東京文化財フォーイーク 2019

「東京9区文化財

古民家めぐり」

期間 10月1日(火)～11月30日(土)

都内9区(足立・板橋・

江戸川・北・杉並・世

田谷・練馬・目黒・江東)

が参加し、文化財となっている古民家を紹介し

ます。各古民家では合同展示として屋根をテーマにパネル展示や解説を行います(江東区はパネル展示のみ)。

江東区内には、江戸時代の民家建築である旧大石家住宅が、仙台堀川公園内(南砂5-24地先)に保存されています。尚、この期間には通常配布していない解説シートも置いてあります。

開館日 土曜日・日曜日・祝日

開館時間 午前10時から午後4時



- 会場 ●都立木場公園(木場4丁目)入口広場・ふれあい広場
- 交通 ●東京メトロ東西線「木場駅」下車徒歩5分
●都営地下鉄大江戸線「清澄白河駅」・都営地下鉄新宿線「菊川駅」下車徒歩15分
●都営バス 業10【とうきょうスカイツリー駅前～新橋】木場4丁目下車



旧大石家住宅

江東区伝統工芸展

入場無料

日時 10月31日(木)～11月4日(月・振休) 午前9時30分～午後5時

※最終日は午後4時まで

会場 深川江戸資料館 地階レクホール(江東区白河1-3-28)

本展では、伝統工芸の技を受け継ぐ区無形文化財保持者による実演・体験を行います(左日程表参照)。

今回の特集は無地染(近藤良治)です。ぜひご覧ください。

伝統工芸品即売(会期中)

会場内で、江東区伝統工芸保存会による工芸品の即売が行われます。また、是非どうぞ。



実演公開日程表		
日程	技術「体験内容」	保持者
10/31 (木)	あめ細工	青木 喜
	べっ甲細工	磯貝 實
	相撲呼出し裁着袴製作	富永 皓
	染色補正	丸田常廣
	建具 「組子コースター 費用1,000～1,500円」	友國三郎
	江戸切子 「小皿のカット 費用1,000円 (午前・午後各6人)」	小林淑郎
11/1 (金)	木彫刻 「亀の根付 費用300円～2,000円」	渡邊美憲
	あめ細工	青木 喜
	刀剣研磨	臼木良彦
	指物 「小箱：費用1,800円／ 手さげ盆：費用3,500円 (3人まで)」	山田一彦
	ふすま櫓・椽	鈴木延坦
	無地染	近藤良治
11/2 (土)	すだれ製作 「色紙掛け 費用500円」	豊田 勇
	あめ細工	青木 喜
	手描友禅	和田宣明
	建具 「組子コースター 費用1,000～1,500円」	友國三郎
	染色補正	丸田常廣
	無地染 「手ぬぐいしぼり染め 費用1,500円 (午前・午後各6人)」	近藤良治
11/3 (日・祝)	更紗染 「東海道五十三次「箱根」 費用2,500円 (午前・午後各5人)」	佐野利夫 佐野勇二
	あめ細工	青木 喜
	紋章上絵	亀山晴男
	帯製作 「付け帯への加工 費用3,000円 (午前・午後各2名まで) ※帯をお持ちください	杉浦正雄
	手描友禅	和田宣明
	無地染 「手ぬぐいしぼり染め 費用1,500円 (午前・午後各6人)」	近藤良治
11/4 (月・振休)	すだれ製作 「色紙掛け 費用500円」	豊田 勇
	あめ細工	青木 喜
	刀剣研磨	臼木良彦
	帯製作 「付け帯への加工 費用3,000円 (午前・午後各2名まで) ※帯をお持ちください	杉浦正雄
	指物 「小箱：費用1,800円／ 手さげ盆：費用3,500円 (3人まで)」	山田一彦
	無地染 「手ぬぐいしぼり染め 費用1,500円 (午前・午後各6人)」	近藤良治
	表具 「一閑張 費用1,000円」	岩崎 晃

(順不同・敬称略)

※都合により変更する場合があります。ご了承ください。

技の体験(有料)

①午前10時～正午 ②午後1時～午後3時

の技術で体験ができます。申込は会場で直接職人さんに申し出てください(先着順)。材料が無くなり次第終了します。

深川江戸資料館 一案内図



会場・深川江戸資料館への交通

- 東京メトロ半蔵門線・都営地下鉄大江戸線「清澄白河」駅下車 A3出口 徒歩3分
- 都営バス門33系統「清澄庭園前」下車 徒歩3分
- 都営バス秋26系統「清澄白河駅」下車 徒歩4分

小名木川

小名木川といえば、開削の歴史に關連して、まず徳川家康の名が浮かんできます。大正15年(1926)刊行の『深川区史』には、天正18年(1590)8月、江戸に入った家康が、鷹狩りの時に下総行徳(千葉県市川市)に立ち寄り、百姓に塩の製造を命じたとあります。これは『事蹟合考』等の記述に基づくもので、そこには「神君天正十八年御入国遊ばされ候、不日に行徳の塩路浜へ船路の通路、早速に仰せ付けられ」(読み下し)と記され、神君(家



本所深川絵図

康)が江戸入国ののち、すぐに行徳への船路の開通を命じたとあります。昭和32年(1957)刊行の『江東区史』も小名木川は行徳産の塩を江戸に搬入する舟路として開削されたと記しています。しかし、『深川区史』には、家康の開削以前から船路らしいものが存在していたのではないかとの見方や、運河となるには土木工事が必要であり、小名木川の開削年代は『御府内備考』(海辺大工町の項)にある寛永(1624)頃が真実に近いと考えても大過ないとの記述もあります。さらに、『新編武蔵風土記稿』には、慶長年間(1596-1615)に小名木四郎兵衛なる人物が開削したとの記述が見られます。

これらの史料は、いずれも江戸時代後期に編纂されたもので、その内容は由緒の域を出ません。仮に家康が開削を命じたことが事実だとしても、そのことをもって河川としての成立と捉えてよいのか疑問が残ります。『風土記稿』の慶長年間、『御府内備考』の寛永頃の記述を考慮すると、天正以降に数度の掘削(拡張など)が行われ、寛永頃までに河川として整備されたと考えた方がよいように思われます。

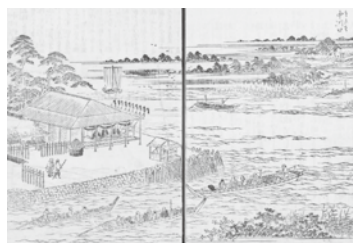
物資輸送と船番所

小名木川は、東北・北関東方面から

江戸に流入する物資の大動脈として重要な河川でした。海から江戸内湾に入りする船が享保6年(1721)以降、三浦半島の浦賀船番所で荷物の検査を受けたのに対し、東北・北関東から江戸川・中川などを通して江戸に入る船は、小名木川の東端、いわゆる中川口の船番所で荷物検査を受けました。

その船番所は、もともと小名木川の西端、隅田川との合流地点に設けられ、寛文元年(1661)に中川口に移りました。その背景を推測するに、移転2年前の万治2年(1659)に大横川・横十間川・堅川が幕府によって開削され、小名木川と堅川が繋がったことがあげられます。その結果、中川口から入った船は、開削された河川を通り堅川に出ることで、西端の船番所を通らずに江戸に入ることが可能になったのです。このことは、船番所移転の要因の一つと考えられます。

いずれにしても、『御府内備考』(海



江戸名所図会 中川口

辺大工町の項)に元和末(1615)から寛永初の小名木川開削時、海辺大工町が奥川船の着岸町

への取り立てを代官伊奈半左衛門に願い上げたことは、この当時、すでに小名木川の流通が盛んになりつつあったことを示すものと考えられるのです。

小名木川の風景

小名木川の整備が進むと、河川両岸には武家地が多く設けられました。延宝8年(1680)『江戸方角安見図』には、横十間川以西に多くの武家地が見られ、仙台堀や油堀など、他の河川・堀割の両岸に町場が設けられたのとは対照的といえます。これらの屋敷は、東北・北関東あるいは江戸内湾を経て領地から運搬した物資の一時保管庫としての役割も果たしたと考えられます。

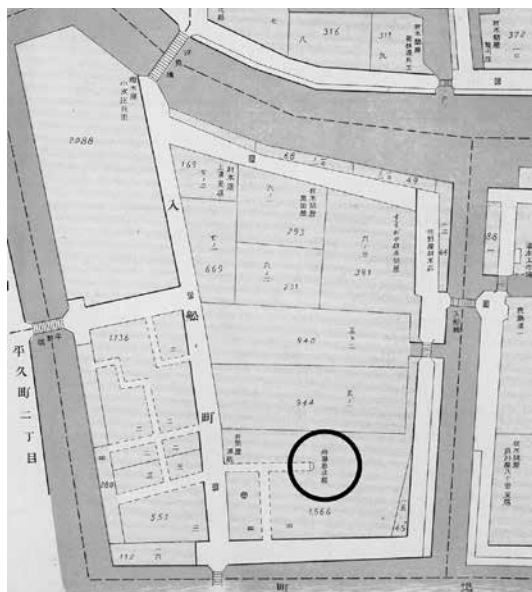
また、人々が深川各所や亀戸天満宮・羅漢寺(大島)などへ船を使って向かうとき、小名木川の風景を楽しんだことでしょう。なかでも猿江の五本松は有名で、あの松尾芭蕉も「深川の末五本松といふ所に船をさして」の前書きに続けて「川上とこのかわしもや月の友」の句を詠んでいます。幕末には、歌川広重も名所江戸百景「小名木かわ 五本まつ」を描きました。このように、小名木川は江戸とその周辺地域の人々に親しまれ、多様な文化を育んだ川でもありました。

(文化財主任専門員 出口宏幸)

■加瀬忠次郎とヨウ素製造■

かつて「赤チン」と呼ばれたヨードチンキや喉の消毒液として使われるヨウ素は、原子番号53番の元素で、溶液をジャガイモに垂らすと青紫色に変化するヨウ素デンプン反応でも知られています。このヨウ素は、1811年にフランスの化学者ベルナール・クルトアによって発見され、二年後に同じくフランス人化学者ジョセフ・ルイ・ゲリーユサックによって「Iode」（ヨード、ギリシャ語の紫の意味から）と名付けられました。

日本では、南部藩領出身の医師島立甫が、弘化3年（1846）に海草を焼いてヨウ素を抽出することに成功し



加瀬忠次郎のヨウ素製造所
（黒丸部分、大正元年「深川区地籍地図」）

ます。江戸末期に活躍した蘭学者宇田川榕庵が記した化学書『舎密開宗』の外編第一巻には、「島立甫創めて之を昆布焼灰中に得たり」と紹介されています。ちなみに島立甫の邸宅は亀戸天神のそば、横十間川を挟んだ西側（現墨田区太平）にありました。ヨウ素は発見された当時、新たな薬品として注目され、海草の焼灰から製造することから、海産資源に恵まれた日本には格好の新資源としてとらえられました。

この新資源ヨウ素に着目し、深川で製造をはじめたのが加瀬忠次郎です。加瀬家は代々和泉屋忠次郎の屋号を名乗る肥料問屋で、嘉永4年（1851）の『諸問屋名前帳』には、

に発行された『薬学雑誌』144号の彙報に「加瀬氏の沃度製造事業」として紹介されています。

その文章によると、忠次郎は明治19年5月に自店で製造した刻昆布や干しアワビなどを持って清国へ渡り、海外貿易を試みます。清国からは肥料の一種である「豆餅」「菜種餅」を購入しようとしませんが、清国の法律により外国への持ち出しが難しいことがわかります。とりあえず所持品を売り払って北京に滞在中、病気を発症しました。すると、同宿のイギリス人夫婦にヨウ素を配合した薬をもらいます。夫婦が言うには「此奇薬は欧州に無くてならぬものなり」とし、原料が海草であり、日本はそれが豊富であることから事業を興したいとのことでした。忠次郎は病気を治すと早々に帰国し、明治20年12月に深川区入船町4番地（現木場2丁目）にヨウ素製造の工場を新設します。当初は製造に苦労しますが、徐々に事業は軌道にのっていきます。その後、日本各地にヨウ素製造が広がり、翌21年には神奈川県三浦郡葉山の鈴木ナカラがカジメを焼いてヨウ素製造をはじめ、同23年には大阪の薬種商武田長兵衛や田辺五兵衛、塩野義三郎の共同出資による廣業舎が設立されました。

忠次郎は、明治22年から深川区議員も勤めますが、同24年に死去し、息子が忠次郎を継いで事業もすすめていきます。同29年に干鰯場のひとつ江川場にあった五社稲荷が富岡八幡宮内の永昌稲荷と合祀され、永昌五社稲荷となりますが、この五社稲荷は加瀬家の所有地にあったものです。

その後、ヨウ素製造の主流が海草灰から硝石へと変化し、チリ産ヨウ素が世界市場を占めることとなります。一方、日本国内では日露戦争後に大蔵省の主導でヨウ素製造業者の集約が行われます。この結果、加瀬忠次郎と葉山の鈴木三郎助、明治26年麻布に棚橋製薬所を設立していた棚橋寅五郎の三社が統合され、日本化学工業社（現日本化学工業株式会社、本社は亀戸9丁目）が設立され、大倉喜八郎を会長に迎え、鈴木が専務、加瀬が常務、棚橋が技師長となりました。鈴木はのちにうまみ調味料「味の素」を作り出したのはよく知られています。加瀬家のヨウ素製造の痕跡は、江東区内にはもう見られませんが、近代になって水産物から生み出した新たな資源に取り組んだ足跡は、記録資料などからたどることができるとです。

（深川東京モダン館 副館長 龍澤潤）

江東歴史紀行

第一回懸賞郵便飛行と「洲崎飛行場」

100年前のできごと

100年前の大正8年（1919）

10月22日に初の「飛行郵便」が試行されたことをご存知でしょうか。帝国飛行協会（以下、協会）主催の懸賞郵便飛行競技として実現し、郵便物を積んだ飛行機が東京洲崎埋立地（現江東区）と大阪城東練兵場（現大阪市）の間を往復しました。

飛行郵便

大正8年7月末、通信省（通信・陸海運輸全般を管掌）は、かねてから協会より申請されていた飛行郵便を許可しました（7月29日付大阪毎日新聞）。そして飛行郵便物は、その引受局を東京大阪両市内の1、2等集配局とし、両市内に宛てた料金完納の第1種有封書状および第2種郵便物（葉書）で「飛行郵便」と朱書して引受局窓口へ差し出したものに限るとしています。

消印には「飛行郵便試行記念日附印」が用いられました。この日附印は使用局名を区別しない

で、東京市内は「東京」、大阪市内は「大阪」とするものでし

た。なお、飛行郵



官報2147号(国)

便試行当日とその後3日間に限っては求めがあれば料金完納の郵便絵葉書に對して記念消印として用いられました（官報2147号）。



『大日本郵便切手類鑑』(国)

また記念切手も発行されました。現行切手の表面に飛行機の形状を1銭5厘切手は赤色で、3銭切手は青色で添刷したものです。東京大阪両市内の1、2等集配局で当日とその後3日間のみ販売され、その使用期間は10月31日までに限られました。

初試行のため、飛行機への郵便物搭載量は8貫目（30キログラム）に制限されています（8月9日付大阪朝日新聞）。封書1通を2匁（7.5グラム）平均すると4千通が運べる計算です。

第一回懸賞郵便飛行

飛行ルートは東海道もしくは海岸沿線として、なるべく小田原、静岡、豊橋、津の付近を通過するものとし、静岡、豊橋、津の各練兵場には予備着陸場が準備され、また小田原海岸には救護場が設けられました。飛行予定は、1日目は東京から大阪へ、2日目は大阪から東京への一往復とし、通過地は往復

とも同一場所とされました。

当初、郵便飛行は10月4日・

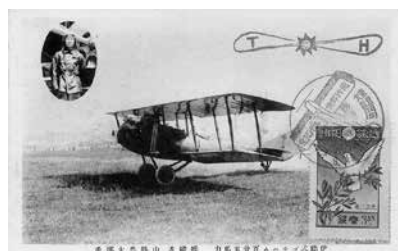
5日に予定されていた。参加は、水田嘉藤太の中島式6型

ホールスコット200馬力

と、山縣豊太郎の伊藤式ゴルハム125馬力の二機です。しかし4日は天候が悪く、5日も不安定だということ

で、20日に順延が決定しました。20日もまた天候不順で22日に順延となっています。その間、佐藤要蔵の中島式4型ホールスコット150馬力機が参加を表明して計3機となりました。

22日当日、出発地の洲崎埋立地では風が強く吹いており、協会や飛行家は実施を危ぶみましたが、観衆の興奮に押されてようやく出発と決定しました。一番手は水田機で、午前10時50分に「飛行場」の南端から北に向かって離陸し、やがて進路を品川方向へ向け



「伊藤式ゴルハム百二十五馬力」(個人蔵)



「中島式ホールスコット二百馬力」(個人蔵)

て長距離飛行の途につきました。続いて山縣機が55分に離陸し、59分には最後の佐藤機が飛び立っていきました。

到着を待つ城東練兵場（大坂城跡の東隣）では、午後2時35分に東方の生駒山上に黒い点が見え、観衆がどよめくなか姿を現した佐藤機が練兵場上空を1回旋回して南方より北方に向かって下降し39分に無事着陸しました（10月23日付大阪毎日新聞）。佐藤機の記録は3時間40分、次に到着した山縣機は4時間41分でした。水田機は和歌山市外に不時着したため失格となりました。

翌23日は、城東練兵場を佐藤機が午前10時11分、山縣機が27分に飛び立ち、「洲崎飛行場」へは午後1時29分に佐藤機、2時14分に山縣機が到着しました。優勝は佐藤機で、往復の航空時間は6時間58分でした。

飛行郵便試行の意義

11月3日、通信省庁舎（現中央区）で3人に対し賞金や慰労金の授与式が行われました。野田通信大臣の祝辞によれば、近年航空および無線電信などの空中の利用が発達し、とくに第一次世界大戦（大正3年）では列国が競って飛行機を軍事に応用し、戦後は一般通信運輸のために利用するようになっており、日本の前途も航空事業に期待するところが大きいこと、そのなかで

協会が今回の長距離飛行を行って民間飛行の発達を助成しようとし、これに通信省も進んで賛助し、結果優良な成績を収めたことは、日本の通信事業発達史上に特筆すべきことであるといえます。また、列国に比べて遅れている航空事業については、なお技術の練達が必要で、官民協同して事業の発達をはかつて社会の利便を増進することが求められるとされています（アジア歴史資料センター「民間航空関係」(2)）。

航空郵便の実現へ

その後、協会主催の懸賞郵便飛行は通信省の協力のもと、大正9年11月21日に第2回（大阪・久留米間）、大正10年8月21日に第3回（東京代々木練兵場・盛岡間）、大正10年11月3日に第4回（金沢・広島間）が行われています。

そして協会が大正11年11月3日から行った連絡定期郵便飛行は、3日から11日までの間に東京代々木練兵場と大阪の双方から郵便物を積んだ飛行機が定期的に上下するという「定期郵便飛行」の基礎の形成を目指した意欲的なものでした（アジア歴史資料センター「雑」(5)）。しかしながら、6日間で運ばれた郵便物は東京行きが5313通、大阪行きが2610通と利用者が少なく、飛行郵便の信頼向上が望ま

れる結果となりました（大正11年11月11日付大阪毎日新聞）。

これまで確実な飛行郵便の実現を企図して民間の試験飛行を援助していた通信省は、大正14年4月20日に東京（立川飛行場）・大阪間、大阪・福岡間で飛行郵便を施行することとしました。その背景には、すでに実現されていた民間による定期航路の存在がありました。大正12年1月11日に東西定期航空会が東京・大阪間に、同年の7月10日には日本航空株式会社が大阪・別府間に定期航路を開いていたことから、通信省は両社に飛行郵便事業を委託しました。

そして今から90年前の昭和4年（1929）4月1日に航空郵便規則が施行され（官報669号）、官民合同の日本航空輸送株式会社が定期郵便と貨物輸送を開始して、日本における航空郵便が実現したのです。

「洲崎飛行場」



官報669号(国)

第一回懸賞郵便飛行の発着地となった洲崎埋立地ですが、「洲崎飛行場」とも呼ばれています。飛行場として利用された初見は、現在のところ大正5年7月1日の「つるぎ号」（岸一太製作）初飛行です。そして郵便飛行が行

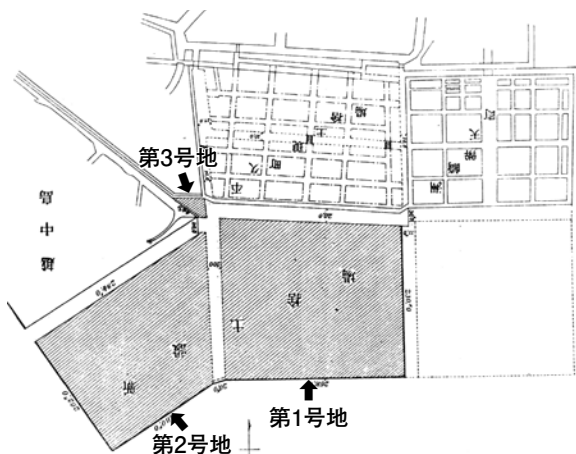
われた大正8年には、2月1日に米国人の飛行家ルス・ロー夫人の公開飛行が行われ、5月10日には東京市主催の奠都五十年祭挙行にあたり協会が記念民間飛行会を開催するなど（アジア歴史資料センター「民間航空関係」(2)）、洲崎埋立地は民間飛行の拠点であったことがうかがえます。

では、飛行場のあった「洲崎埋立地」とはどこでしょうか。大正9年4月17日、協会が来る21日に実施予定の「東京大阪間往復無着陸飛行」について海軍省航空部へ連絡した文書には「洲崎埋立第二号地ヲ発着飛行場トス」とあります（アジア歴史資料センター「民間航空関係」(2)）。この時の飛行場は第2号地に設けられたことが知られます。おそらく前年の郵便飛行も当地で行われたのでしょう。

第2号地（のち浜園町）は、越中島地先で現在の塩浜1丁目にあたります。第1号地（のち塩崎町、現塩浜2丁目）、第3号地（のち古石場町うち、現古石場3丁目）とともに、東京市内の河川浚渫土の処分をかねて埋め立てが行われた所で、明治43年（1910）12月17日に起工されています。

「洲崎埋立地」とは

さて「洲崎埋立地」という名称は、明治19・20年に埋め立てされて洲崎弁



『東京市史稿』港湾篇5(国)所収図を改変

天町（現東陽1丁目）となった所が「洲崎海面埋立地」「洲崎埋立地」と呼ばれたことに由来します。明治32年には洲崎弁天町西隣の平久町地先海面（のち塩浜町、現木場1、6丁目）の埋め立てが始まり、続いて前述した第1・2・3号地の埋め立てが行われます。第2号地も「洲崎埋立地」と呼ばれたことから、「洲崎埋立地」は深川臨海の埋立地を呼ぶ名称として使われたことが知られます。

その後、「飛行場」は「洲崎埋立地」において幾度か移転します。その場所がどこなのか、探求する楽しみが尽きません。

参考文献：『日本航空史 明治・大正篇』
※図版の国は国立国会図書館デジタルコレクション

（文化財主任専門員 栗原修）

古写真の中の江東

江東区の映画館2

本誌No.285でも紹介しましたが、かつて区内には多くの映画館がありました(昭和27年(1952)には7館、昭和33年には15館)。今回は古写真を基に「千田シネマ」(千田22付近)を紹介しましたが、今回も昭和30年代の古写真から区内にあった映画館を紹介します。

深川ミリオン座



①深川ミリオン座

「深川ミリオン座」は富岡にあった映画館です(所在地は富岡1-10付近)。中央付近に見える「ミリオン座」という縦書きの看板が目を引きます。左側に見える門の向こうにある道路は永代通りです。

邦画と洋画

次にミリオン座の入口の上にある看

板(②)に注目しますと、「松竹映画」^{しょうちく}「各社洋画」という表記が見えます。



②ミリオン座の看板(拡大)

この看板からミリオン座では、邦画では松竹の映画を上映し、一方で洋画は、複数の制作会社の映画を上映したことが示されています。

ちなみに昭和30年当時、日本国内では一年間に616本の映画が公開されましたが、その内邦画が423本、洋画(この場合日本国外の映画全般)が193本となっており、邦画が洋画の約2倍以上となっていました。

それに対し、平成30年の場合、映画の公開本数は1192本、その内邦画は613本、洋画が579本となっています。全体的に映画の公開数が増えていますが、洋画の公開数が増え、邦画と洋画の割合は半々に近くなっています。

ミリオン座で上映した映画

さらにミリオン座が上映した映画へ

注目してみると、その手がかりとして門にかけられている幕(③)に上映中とみられる映画の題名が二つ確認されます。左側には「アラモの砦」と記されています。これは1835年にメキシコ領テキサス(現在は米国領)の独立運動で発生したアラモの戦いを描いた洋画です(昭和30年11月公開)。



③ミリオン座の幕(拡大)

尚、この戦いを描いた映画は、昭和35年(1960)制作のジョン・ウェイン主演による「アラモ」など複数あります。

次に「女の足あ」という部分ですが、これは昭和31年3月に公開された「女の足あと」という佐田啓二・有馬稲子^{さだけいじ}などが出演した松竹制作の邦画と推定されます。

さて、この後ミリオン座は、昭和35年には邦画では日活の映画も上映しています(『映画年鑑別冊(戦後編)』全映画館録1960)。さらに昭和40年代前半には、松竹の映画を上映しなくなりま。また昭和44年には地図上の表記では「深川ミリオン座」となっ

ていますが、正式な名称は「深川ミリオン日活劇場」となっています(『映画年鑑1970年版別冊』)。上映する映画の転換は、ミリオン座が映画制作会社の直営ではないためと考えられます。

なお、ミリオン座は1972年の段階で確認されなくなるので(『映画年鑑1973年版別冊』、70年代の初めに閉館となったと推測されます。おわりに

このように看板や幕(映画の題名)に着目すると、写真①は昭和31年3月以降の撮影と考えられます。今回は細部と映画館の動向に注目してみました。古写真は全景だけでは無く細部・撮影されている建物にも注目することで見過ごしがちな撮影された当時の状況を知ることができます。

(文化財専門員 功刀俊宏^{くぬぎ})

お詫びと訂正

前号(No.286)「瓢池園と旭焼製造場」に誤記がありました。

6頁写真2の所蔵元

誤…信楽窯業技術試験所

正…信楽窯業技術試験場

7頁1段目14行目

誤…商工学校

正…職工学校

お詫びして訂正いたします。